

經濟論叢

第101卷 第1号

佐波宣平教授記念號

献 辞	出口 勇 藏	
組織論史におけるバーナード理論の意義	山 本 安 次 郎	1
スミス経済学における巨視的モデル	青 山 秀 夫	22
マクロ経済学の論理と政策的指向性	島 津 亮 二	35
資産選択の理論	鎌 倉 昇	53
ロ イ ズ	谷 山 新 良	62
巨視的計量モデルにおける乗数	森 口 親 司	81
Activity Analysis と立地モデル	小 林 清 晃	94
地域経済の構造分析	井 原 健 雄	111
輸送投入と産業連関分析	山 田 浩 之	131

佐波宣平 教授 略歴・著作目録

昭和43年1月

京都大學經濟學會



佐波宜平教授近影

佐波宣平 教授 記念論文集

献 辞

この学年に、本誌は3たび評議員を送る辞を巻頭にかかげねばならぬ。佐波宜平教授が3度めに送られるその人である。

教授は世にたぐいまれな好学究理の士である。昭和5年に本学御卒業と同時に、小島昌太郎教授について研究されはじめた、交通・保険学の専攻学科では、教授の研究は、近代経済学的な思考方法を取り入れることによって、清新で大幅の展開がみどり、その成果には、昭和28年に運輸省第1回交通文化賞が授与せられ、また、日本海運経済学会の副会長であるにふさわしい業績となって、学海にさおさす人々の行く手を照らす一群の星となっている。また数理経済学にたいする教授の傾倒は、わが学部でその講義をすすんで希望される底のものである。

教授はさわやかな君子である。君子たるにふさわしく、その交りは水のように淡泊であって、後味はすこぶる新鮮である。われわれはつねに、「好学はげまざるべけんや」という刺戟を受けとるのである。他方で教授は、専攻の学術にたいする迫真の気魂とともに、文芸を愛好し、史書にしたしみ、俳句をひねり、随筆をものする心の余裕をもっておられる。保険や海事に関する教授の随筆はその余裕の一端をしめすものであって、現代の経済学者には珍重すべきものである。

教授はもと頑健であった。もし現在もなお健康にめぐまれておられるならば、教授の研究業績の偉観もあるいはうなづけるでもあろう。ところが実際には、ここ15年のあいだ、教授の日常は病苦との不断のはげしい闘争によって彩られているのである。眼底をそこない、内臓の諸部分をおそい、知覚神経をおかす病魔との闘いは、常人の堪ええぬ程度のものであって、教授の精神心の高さと強さとを仰ぎみさせるに足りる。教授の学業がそういう生活のあいだに営まれたとわかるとき、偉大な業績にたいするわれわれの驚異は讃嘆にかかわらざるを

えない。

教授の専攻科目は、世の多くの人がたずさわるものではない。けれども教授は有能な同じ専門の後継者を養成することに成功された。後顧のうれいのないことは、わが学部のために、またわが国の学界のために、慶賀すべきことである。

評議員の地位を近く去りゆこうとする教授にむかって、わたくしはただ「好学の君子、こいねがわくば自愛せられよ」というばかりである。

昭和42年11月14日

評議員長 出口 勇 蔵